



住みやすい地域を めざした「当事者活動」

🕒1978年、

地域交通への取り組みを

上田 ますひと

「24時間、介助者を入れた生活を
している障害者です。」

上田さんの「Twitter」には、シンブルにそう書いてある。上田さんは、「障がいのある人々の住みよい社会づくり」を地域ですつと続けてきた人だ。今回は、上田さんのご自宅でお話をうかがった。

「障がい者が住める地域を！」

「僕は被ばく二世であり、難産で生まれた脳性麻痺者でもあります」。開口一番、上田さんは言った。上田さんが生まれたのは1948年。母親は原爆投下の2日目に広島市内に入り、「被爆者手帳」を所持していたという。

当時は障がい児を恥だからと隠す家庭も多い中、上田さんの親はオープンにっていて、近所の子どもたちとも遊んでいたそうだ。6歳になったとき、親戚に学校関係者が多かったこともあり、地域の小学校に入学することができた。家族が学校に付き添うのが条件で、8〜9割は母親が同行し、父と姉の付き添いで修学

旅行にも行ったという。

ところが、中学2年生になり教室が2階になると、母親が上田さんを運び上げることができず、5月以降、在宅障がい者になる。「友だちが進学や就職をする中、自分だけ取り残された口惜しさから、社会について学ぼうとさまざまな本を読みました。本で得た知識が今、役立っているかもしれません」と上田さんは穏やかに語った。

次の転機は25歳の時。「行政の誘いの言葉に血迷い」、障がい者施設に入所する。そこは10人部屋で入浴は週2回、食事は介助無しで自分で食べるしかなく、時間内で食べ切ることができず、読書やテレビを見ることもできなかったという。最初は自由だった面会も、制限された。親しくなった女性もいたが、恋愛などご法度という雰囲気だったそうだ。あまりにも人権無視の管理体制に嫌気が差し、7か月ほどで施設を退所した。

ところが、地域で暮らそうと思つた矢先に、母親がリュウマチにかかってしまう。父親が母と上田さんの面倒をみなくてはならなくなり、3人も死ぬのではという危機感が募り、両親を姉に預けて、自分は東京の施設に行こうと決意する。

1978年、30歳の時に上京し、障がい者解放運動の草分け的存在だった「青い芝の会」のメンバーや光明養護学校(現・東京都立光明特別

